HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	キリシタン版の日本語と印刷術についての研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	白井, 純
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7145号
Issue Date	2021-09-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82997
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Jun_Shirai_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　白　井　　純

学位論文題名
キリシタン版の日本語と印刷術についての研究

・本論文の観点と方法

本論文は，ここで「キリシタン版」と呼ぶ日本語の文語体の宗教文献にみられる特異な文法現象と，仮名と漢字を用いる国字本の表記における使用分布およびそれらの活字を用いた印刷術，という 3 つの領域の研究テーマを，多角的かつ多層的に考察した論考である。論文本編の「A.研究篇」は 552 頁，資料編は 5 冊からなり計 1578 頁に及ぶ，浩瀚かつ詳細なる研究になっている（研究篇と資料編をあわせると 2100 頁超，また，原稿用紙換算 8000 枚超となる)。「B.資料篇」は前期国字本 4.5 万字，後期国字本 52 万字，木活字版『こんてむつすむん地』7 万字の切り抜き文字画像の観察による，3 種類の活字版についての字種水準での集計表と，活字印影の特徴から分類した活字水準でのキリシタン版国字本の文字総索引からなる。 日本語の文法と表記，また，印刷術にまたがる国語学と文献学（その関連領域も含む）の浩瀚かつ高度な研究成果ということができる。

・本論文の内容

以下では，論文本編「A.研究篇」を中心に，その第 1 部から第 8 部までを順に述べる。

第 1 部総論では研究史を概観し，キリシタン版の概要の紹介，宣教師の日本語学習という点から見た新知見の説明をしている。

第 2 部文法研究では文語文の文法，特に敬語法に注目し，独自の特徴を論じた。与格助詞「に」と「へ」では後者に上位待遇性があること，助詞「より」「から」のうち前者が，神や聖人などの高位者から人間などの低位者に向けた動作を表す構文の主語相当の位置に現れること，使役・尊敬の助動詞「さす」について，キリシタン版がもっぱら使役の意味に固定して用いること，キリシタン版にみられる「動詞＋ものなり」「動詞＋ことなり」構文において「もの」が待遇性の低い名詞「者」の意味を残すため神や聖人など高い待遇性を備える対象が主部になると「ものなり」構文が現れにくいこと，キリシタン版では敬語動詞や敬語補助動詞，助動詞を用いた敬語法が整理されており，待遇の対象に応じて敬語法が階層化されていること，高位者を助動詞「らる」で待遇する公尊敬がキリシタン版に見られないこと，二重敬語「させ給ふ」「させらる」をあまり用いず「給ふ」「らる」を無標とする特徴をキリシタン版が持つこと，動詞「対す」周辺での不規則な敬語表現は写本の事例では活字本と事情を異にすること，漢語に「させらる」が直接接続する例はキリシタン版の敬語法に反する特徴でサ変動詞の不十分な理解に起因する可能性があること，などを指摘している。

第 3 部表記研究では仮名用字法とローマ字本の疑問符の用法を取り上げている。後期国字本の仮名用字法では，格助詞や同じ仮名の連続で組織的な仮名用字法がみられること，前期国字本では語頭とそれ以外の仮名用字法が語種によって異なるが助詞の仮名用字法には明確な特徴がなく，その点で後期国字本と異なること，原語ではキリシタン版と共通する規則的な仮名用字法がみられないことから表記上の習慣による部分が大きく，語の境界を表す機能まで明確に意識されていたとは考えがたいこと，キリシタン版の疑問文を引用する「と」の後ろに疑問符が置かれた例は分節記号の機能を優先させたもので欧文では生じない現象であるものの，日本語文に適用した結果生じた齟齬であること，などを明らかにしている。

第 4 部定訓研究では，それぞれの漢字に最もよく結びつく和訓（定訓）がキリシタン版国字本と

漢字辞書『落葉集』で強い関連を持っていることを，『落葉集』の同訓異字と宗教書『ぎやどぺかどる』での用例を比較して確認している。定訓は漢字表記だけでなく，『日葡辞書』では漢字表記を導くための注釈としても機能し，合理的な設計になっていること，定訓内にある和訓はすべて表記されるわけではないが，定訓で読まない場合には和訓全体を書き込むことが多く，定訓の有効性がおおむね確認されること，などを指摘している。

第 5 部『落葉集』研究では，掲出字種と語彙，部首の認識を中心とする資料研究を取り上げ，定訓の安定性が，漢字と和訓の結びつきの定義であり，同時に辞書内での相互検索可能な手段としても機能していること，漢語を掲載する「本篇」が形式上類似する古本節用集からの引用によって成立したとする先行研究を修正し，常用性の高い漢字を選び出し，それを繰り返し使用することで構成可能な漢語を列挙したと考えられることを主張している。また，「小玉篇」が伝統的な部首分類と独自の分類方法の長所を活かした合理的な設計であることを確認している。

第 6 部印刷術研究では，キリシタン版の印刷術に注目し，キリシタン版国字本の全活字印影の切り出し画像に基づいて，仮名と漢字を中心とする日本語表記との関係を分析している。『落葉集』は漢字辞書という性格上必要な活字数は概して少なく，活字制作のコストを考慮して在庫数を確保するに留まったと推定できること，印刷しようとする文献の文脈に大きく依存せざるを得ない字種と在庫数の管理は難しい課題であり，量産型金属活字と，木活字を含む非量産型活字のハイブリッド印刷が，キリシタン版の印刷術が当初から想定していた日本語表記への合理的な対応方法だったこと，後期国字本の仮名の連綿活字は頻度の高い形態素に優先的に対応するが，同じ文字列であっても自立語の開始位置を跨ぐ位置では全く使用されず，語の単位を意識して可読性を向上させる機能的な運用があったこと，原田版『こんてむつすむん地』では連綿活字の運用面で似て異なる特徴を持つこと，『ひですの経』では一部の連綿活字にみられる傷の特徴から金属母型ではなく，砂もしくは粘土を用いた鋳型に基づく可能性があること，などを明らかにしている。

第 7 部『ひですの経』研究では，2009 年にボストンで発見された孤本『ひですの経』の原本調査に基づき，語彙と表記にはキリシタン版の規範性に反する例が多いこと，キリシタン版は写本や『ひですの経』本文のような日本語を活字印刷段階での校正によって修正し統一することで高い規範性を実現していたこと，『妙貞問答』との比較から両書の日本語の特徴やキリスト教教義の理解水準が大きく異なることを根拠に『妙貞問答』の著者不干ハビアンが『ひですの経』の編集にかかわった可能性は低いこと，などを指摘している。

第 8 部関連研究では，第 1〜7 章に関連するその他の研究をまとめており，2019 年 9 月にブラジル国立図書館で中南米初のキリシタン版として発見されたリオ本『日葡辞書』の収蔵に至るまでの経緯と概要の報告を含む。ここでは，パリ本以外の諸本に一致する特徴から，リオ本がパリ本と同じ初期の印刷・製本によるとは言えないことを指摘している。さらに，古活字本『脩華嚴奥旨妄盡還源觀』木製活字の回転襲用の方法から，一定の間隔をあけて再利用されることなど，を確認している。

論文本編「A. 研究篇」に付された「B. 資料篇」では，「A 研究編」での分析に用いた資料とデータをすべて掲出し，字種別の集計と活字別の全使用例の索引をまとめ，掲載している。

以上